

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会だより

第2号 2003年7月31日

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

発行責任者： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

生態系（植物・生きもの）調査実施

生きもの部会長代理中村正照

生きもの部会では B ゾーンを中心に生態系調査を実施しました。6月12日に植物、6月22日は生きもの。植物は岩瀬 徹氏（千葉県立中央博物館友の会会長、元柏市自然環境調査会指導員）、生きものは浅間 茂氏（県立千葉高校教諭）柄澤 保彦氏（野田市立岩名中学校教諭）を講師に、生きもの部会の会員も参加して実施しました。調査結果については現在、市の環境保全課で取りまとめ中ですが、その概要は下記の通りです。また、調査会では、シュレーゲルアオガエルとアマガエルの見分け方も教わりました。



（シュレーゲルアオガエルを撮影中）

生態系調査実施概要

柏市環境保全課 橋爪記

植物調査：当日は雨。ガマ、マコモ、アシ等の主要な植物の分布図を図面に記録。低層に植生するイヌスギナなどについても記録する。全体的にガマの繁殖が進んでいる。またミントの一種などの外来種も確認された。**参加者は12名。**

動物調査：ビオトープ内に生息する生き物を会員が採集し、講師から解説を受ける形で実施した。記録は個体毎に非常に多いものは「×××」、多いものは「××」、一個体でもあれば、「×」とし、34種について記録した。アメリカザリガニの繁殖がすすみ、生物多様性の維持に影響が出始めている。また、当日はシオカラトンボの産卵を見ることもできた。**参加者は17名。**

今後の予定：今回の調査結果を基に、ビオトープの今後の維持管理（優生種の間引き、等）の方針を決めて作業を実施したいと考えています。

生きもの調査 参加者からの感想：

子どもは少なかったけど、おじさん、おばさん方が多く、少し驚いた。

ミズムシという小さな生き物をみんなは見つけられなかったのに、先生はすぐ見つけてすごいと思った。網で簡単にザリガニがとれてびっくりした。その時のザリガニを今、家で飼育している。またいろんな生き物に会いたい。

（中原中 石垣くん）

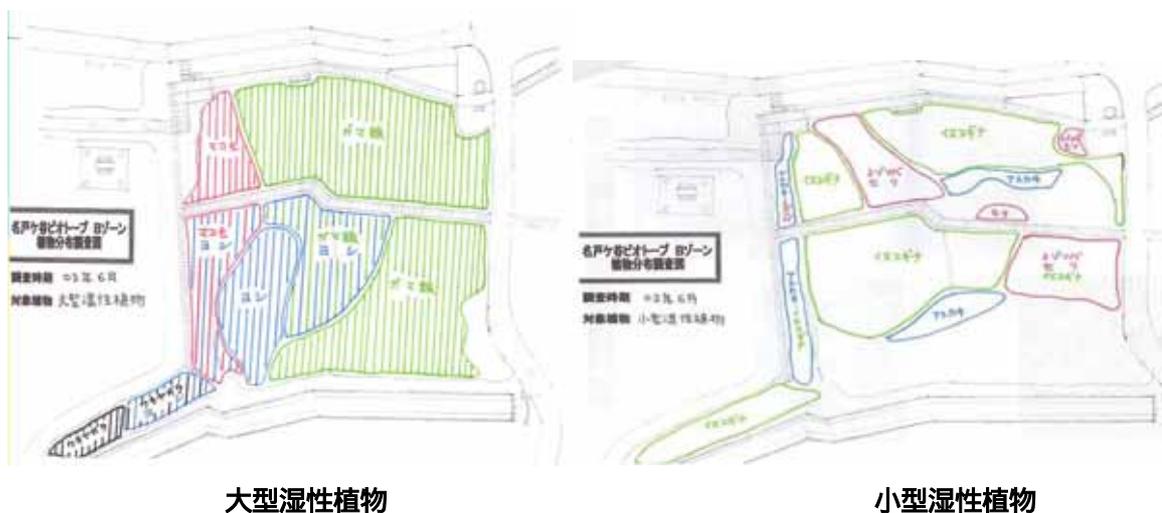
名戸ヶ谷ビオトープ生態系調査（動物編） 2003/6/24

名称	(1)	(2)	(3)	(4)
アカミミカメ				+
アキアカネ		+	+	+
アシイトトンボ			+	
アブラムシ	+++	+++	+++	+++
アリカサガニ	+++	+++	+++	+++
イオイロハシクモ			+	
オオシオカトンボ(産卵中)		+		
カダヤシ	+++	+++	+++	+++
カマキリ		+		
カマムシ			+	
キアゲハ		+		
キアシナガハチ			+	
クサクモ		+++		
クビキリキス			+	
コガネクモ	++			
サカマキカイ		+		
シオカラトンボ			+	+
シュレーゲルアオガエル	+			
ショウジョウトンボ				+
ナカコガネクモ	+++	++	++	
ナツアカネ		+		
ナナホシテントウ			+	
ナシデントウシ			+++	++
ニホンアカガエル	+			
ニホンアマガエル	++	++		
ヒゲナガアブラムシ		+		
ヒメタカ			+	
ヒメタニシ		+		
ヒラタアブの一種			+	
フタモンアシナガハチ			+	+
フタモンテントウシ			+++	
ヘビシジミ			+	
ミスズマシ	+++	+++	+++	+++
ミスムシ	+			

※ +++非常に多い、++多い、+1個体でもいればチェック

名戸ヶ谷ビオトープ Bゾーン植物分布調査図

調査時期 2003年6月



大型湿性植物

小型湿性植物

観察された植物 (Bゾーン)

ヨシ、マコモ、ガマ、コガマ、ヒメガマ、イ、ウチャガラ、チガヤ、マツカサススキ、アシカキ、セリ、ホタルイ、イヌスギナ、ミゾソバ (以上は水辺、湿地を好んで生育する植物) ガガイモ、ドクダミ、ノゲシ、ハコベ、ヒメジョオン、カラスノエンドウ、キクイモ、ニワゼキショウ、オニノゲシ、ネズミムギ、アメリカセンダングサ、オオバコ、ツメクサ、ブタナ、セイタカアワダチソウ、ミント、ツルマメ、ヌスビトハギ、オヤブジラミ

ザリガニ釣り大会

5月20日(火) 2・3校時 名戸ヶ谷小学校4年



オニヤンマのヤゴをはじめ、たくさんの水生生物がザリガニに捕食されており、このままでは多様な生物の生態系が破壊されかねない。そこでザリガニを減らすことを目的として学年では各クラス6班に分け、ザリガニ釣り大会を行った。場所は名戸ヶ谷ビオトープBゾーン。餌は自由。釣り竿は自分の身長を超えない長さの棒。制限時間60分以内に釣り上げた数で3位までを決定し表彰する。結果は1組100匹、2組134匹、合計234匹。



感想：予想外に沢山つれる。多い班は38匹、少ない班は4匹。この差は釣るポイントの違いにもあると思うが、せっかく釣り上げても怖くて手で捕まえることができず、逃がしてしまう場合が多かったからである。それから10日程後に3年生が行ったザリガニ釣り大会ではなんと600匹も釣り上げている。釣り方のコツは4年生から教わったとのこと。

感心したのは、このままではヤゴやホタルの幼虫がザリガニに食われてしまうのではないかと危機感を持った子どもたちが自主的にリハサルをしていたことです。ザリガニ釣りによって名戸ヶ谷ビオトープは子供たちにとっていっそう身近なものになったのではないかと思います。(中村 正照)

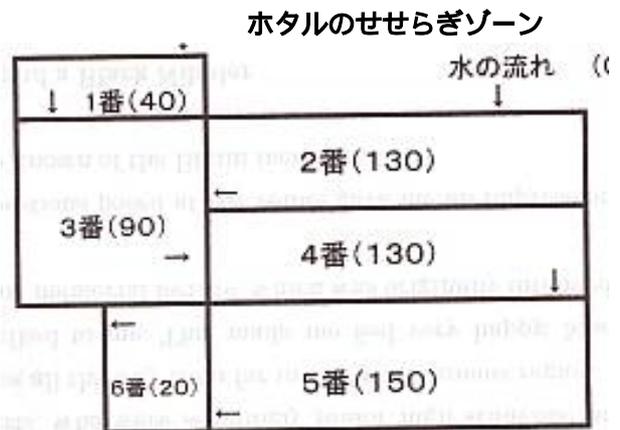
5月17日に田植えした稲は順調に成長しています。7月19日、佐原市の藤崎さん宅を訪問し、持参した稲を岩澤先生に見ていただきました。立派な稲とのこと。少し自信が出ました。みなさんの努力の成果です。5月末には糸ミミズが見られ、場所にばらつきがありますが、自然で豊かな土壌のようです。貴重な赤ガエル、ホタルの餌になるサカマキガイ、生物の敵ザリガニも多く見られ、水田 - ましてや、動植物と共生する耕法の水田、は見るだけで楽しいものです。今年は天候不順でしたが、これから夏本番ともなれば、日々の変化も大きく、一層楽しめます。

1. 草取り：雑草の生長が早く、5、6、7月と毎月草取りを実施しました。今後も毎月2回程実施します。
2. 害虫の発生と対策：6月に入り突然「イネミズゾウムシ」が発生しました。時期が少し早いので、岩澤先生と相談、炭を作る時に採れる「木酢液」を750倍に希釈して6月8日に散布しました。これ一回きりです。木酢液は他の動物にはほとんど無害だそうです。
3. ボーイスカウト柏7団育成会の「ザリガニ釣り大会」：7月12日、ビーバー・カブスカウトと父兄40名が参加して楽しみ、水田も見学しました。
4. 水田に番号をつけました：今後は「何番の水田が水不足」等と利用してください（下図 参照）

5. 不耕起栽培のモデル水田見学：7月19日（土）、佐原市の藤崎農園の水田（不耕起栽培 15年）を見学しました。参加者6名。藤崎ご夫妻・岩澤先生にお会いし、素晴らしい水田に感動すると同時に、先生の熱の入った説明に参加者一同、まばたきを忘れるほど聞き惚れました。以下はその要旨です。



（稲の栄養状態をチェックする岩澤先生）



- ・水田は糸ミミズの活動で土壌がどろどろに改良されるうえ、雑草が生えない効果もあり（実際、不耕起栽培の水田には雑草がほとんど見られず）、糸ミミズの活躍は予想以上の効果を生んでいる。
- ・土地を少し硬くするため水田は水切り中でしたが、水のあるところにはメダカがいっぱい。
- ・自然の植物は子孫を残すための知恵として発芽を一ヶ月毎の時差で行い、気候による天災を避ける工夫をするものだ。

・植物は動物以上に生存競争が激しいもので、最強のものを残すと他が負けて全体がダメになる。従って、選別には一番強いものと一番弱いものを除去して、平均的なものを残し、競わせるのがよい。

「不耕起栽培は水質と環境の改善にも役立つ。是非全国に広めたい」と情熱をこめて語る岩澤先生はまるで青年そのもの、とても70歳には見えませんでした。7月22日には滋賀県に出張して琵琶湖の水質改善に取り組むとの由。頭が下がります。

梅雨の晴れ間に水田の上をシオカラトンボが数匹舞い飛んでいました。農薬もない上、餌になる小虫が一杯いるからでしょう。無数の小さなアカガエルやイナゴ等の子虫は子どもの頃の田舎のたんぼを思い出させてくれます。みなさんと「たんぼ作り」を始めて4ヶ月。田も今や緑の絨毯です。6月14日の「雑草取り」は、稲と雑草の見分けが大変でした。その後も雑草が目立つので、有志の方で雑草取りや畦の草刈りをしましたが、なかなか大変。7月19日に2度目の「雑草取り」を行いました。稲の丈も大きくなっており、足は深く潜るし、顔に稲の葉先は当たるし、これまた大変でした。みなさんで「いい汗」をかきました。本当にご苦労様でした。



私は自転車で5分位なので、土曜か日曜にたんぼを見回っていますが、稲の生育や病気については全くわかりません。小岩井部長のご指導で作業の手伝いをしていきたいと思っています。9月の「稲刈り」まで、しばらくは全員での作業はないと思いますので、時々、たんぼや周辺の様子を見に来てください。19日には一部の稲の茎が丸くなって「穂」が出る準備ができているようでした。梅雨明け後の早朝には、稲の花も見られますよ。それから、休みの日には、大勢の子供たちがザリガニ採りをしていますが、危ないので畦やたんぼに入らないよう皆さんも優しく声をかけてやってください。

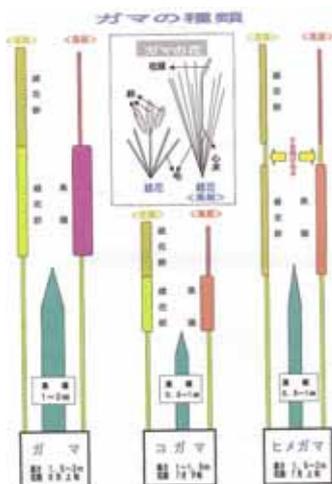


花だより

佐々木光正



ビオトープで一番繁茂している植物はガマ類です。日本には三種類のガマ類がありますが、ここでは三種類が揃って見られます。最初（6月初旬）に咲いたのはガマ。これが咲き終わり、果穂になる頃（7月初旬）次にヒメガマが咲き始めました。ヒメガマは雄花穂と雌花穂が少し離れて付くのが特徴です。これが細長い果穂に変わる頃（7月下旬）三番目のコガマが咲き始めました。コガマはガマに似ていますが、名前の通り小型で、葉の幅が狭い点でガマと区別出来ます。ガマ類は花が終わっても果穂が残りますので、秋から冬にかけてもその姿を楽しむことが出来ます。ガマ類と並ぶ大型の植物がマコモ（右上写真参照）とヨシ。イネ科の湿地植物で、8 - 9月にかけて大きな花穂をつけます。小型の湿地植物では7月にセリがたくさんの白い花をつけました。また、イネ科のアシカキが地味な花穂を立て始めました。秋にはミゾソバの可愛い花が楽しめるはずです。



Aゾーンでは、Bゾーンと少し違った花を見ることが出来ます。そこには稲作と生活を共にする花が水田の中に咲きます。これからお盆にかけてはミソハギの美しい紅紫色の花が群れ咲いてくれています。8月に入ると、矢じり形の面白い葉を持ったオモダカが稲穂の中から白い花を持ち上げてきます。水面に目を落とすと、金魚藻のような葉をつけたキクモがほのかな紅色の花をつけているのが見えます。夏から秋は、これ以外にも数多くの水田雑草（チョウジタデ、アメリカアゼナ、コナギなど）の花が見られます。

かつての名戸ヶ谷湧水地の名残である湿地植物や懐かしい水田雑草の花々に会ってみませんか。毎月の植物観察会（毎第3土曜、10時から）でお待ちしています。
（生きもの部会副部長）

大盛況 ホタル観察会 800人の参加

ホタルが訴えている小さな声に耳をかたむけよう

ホタル部会長 松本徳重

「うわーきれい！」

「ホタルが飛んだ!」「ほら、ほら、すぐそこにきたよ」

周囲の駐車場の電灯が消え、ホタルが川下からふわふわと飛び回り始めた瞬間、一斉に歓声が沸き上がりました。ホタルは光に弱い。鑑賞会に備え、私たちは遮光ネットを張ったり、ベニヤで覆いをしたりしましたが、完全に光を遮断するのは難しく、あちこちから容赦なく光がホタルの棲息場所にやってくる。「柏にまだこうした環境が残っていたなんて不思議です。この自然環境を是非残したいですね・・・」「子どもにホントのホタルの光を見せたくて来ました。ありがとうございました」「また来年も見せてください」・・・こんな言葉を残しながら、多くの方々は嬉しそうに帰宅していきました。

今年のホタル鑑賞会には7月19日に450名、20日に350余名、延べ800人余もの地域の方々を中心としたお子さん連れ、家族揃っての参加が多かったことも、子どもや父母の間の関心の高さを示しています。おじいちゃん、おばあちゃんの参加が意外に多いのも今年の特徴で、「この歳になって自然に棲息するホタルをまた見られるとは思ってもみませんでした。自然環境が悪くなっているのもう無理と思っていたんですよ」・・・

こうした感想を何人もの方々が漏らしていました。「地域の自然環境を破壊せずになんとかしてほしい」-それはホタルの私たちへの訴え。その小さな声に耳を傾ける必要性を痛感させられた「観察会」でした。「ホタルは次世代に伝え残したい日本の原風景」-これはホタル研究の第一人者である大場信義先生のことばです。明るすぎるほどの駐車場の電灯をはじめとして、利便さのために不必要な光が周囲になんと多いことでしょう。

今回のホタル鑑賞会は名戸ヶ谷病院、D2、柏市環境保全課をはじめ、多くの方々の協力で成功することができました。来年に向けて、ホタルが自然に棲息できる環境を準備するために「ホタルサミット」等を開き、みんなで知恵を出し合い、直ぐにできることから取り組んでいきたいですね。

ホタルの光の原風景が名戸ヶ谷地区から消えないようにするために...



Heyke Firefly Observation

開催日：平成15年7月19日(土)20(日)

時間：午後7時30分～午後9時

集合場所：名戸ヶ谷病院第3集合場所

参加者：約800名

名戸ヶ谷小児童、保護者

ビオトープ会員、地域住民など

主催：柏ホタルの会

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会



篠崎会長、三坂副会長制作の立て看板

編集後記

この間の活発な活動を反映してか、寄せられた原稿や資料は大量。編集の都合上大幅なカットを余儀なくさせられました。尚、生態系調査報告を入れましたので5頁になりました。ご了解ください。「広報かしわ」(6月15日号)に2面に亘り特集記事「名戸ヶ谷ビオトープ」が掲載されました。ご覧になりましたか。今号から「花だより」を連載します。お楽しみに。また、掲載を予定していた「ミニ用語解説」「下田の森紹介」「NPO 法人化問題」などは次号に譲ります。

広報編集部